



YA Zine

親爺が作る、親爺のための、適当で、いい加減な雑誌



男を惚れさす男でなけりや
粹な年増は惚れやせぬ

SABism Portrait Studio

●サビズムポートレートスタジオ

現在ホームページを制作中です。

お問い合わせは下記までお願いします。

島製作所：tel.03-6441-2604

mail:info@sabism.com



あなたの魂まで撮らせていただきます。

プロフィール写真・宣材写真・アーティスト写真から遺影まで。
今の旬なあなたを、人生をたっぷり生きた親爺が粹に撮ります。

編集後記

「男を惚れさす男でなけりや、粹な年増は惚れやせぬ」表紙のこの言葉は落語「居残り左平次」の中に出てくる都々逸(ごどい)ですが、今回の表紙と巻頭を飾ってもらった焼き絵師の「元心」さんは正にこの都々逸がぴったりとくる男でした。出会いは01号の表紙の藤島さんのライブで二度ほど見かけ、どこにも気にならず仕方がないので藤島さんにあの着物を着た怖そうなおっさんは何をしている人なのかを聞いてみました。あの人はなめ革に絵を描く焼き絵師でさらに小指が無い人だぞ、と聞いてますます興味がわきました。OYAZINEに登場してもらいたいと思いましたが、どんな人だかは全くわからない。一か八か信じるのは自分の勘しかありませんでした。絶対におもしろい人だと。幸いFacebookで藤島さんの友達だったので友だち申請したら承認してもらえました。さらにOYAZINEを送って見てもうたら快く引き受けてもらえました。あとは会えばなんとかなる！といういつもの適当でいい加減なスタイルで取材に向かいました。詳細は巻頭の岸さんの記事に譲りますが、元心さんに会って一番印象的だったのは「元極道の親分だったとは思えない」「柔軟さ」でした。それは強い男ゆえのしたたかな「やさしさ」でも言った方がいいのか、男気に溢れた正に男を惚れさせる男でありました。(島)

小指のブルース

「元」に「心」と書いて、元心(げんしん)と読む。2年前、元心さんは、現役バリバリの極道の組長さんから芸術家に転身するという、二世代の賭けに出た。画家デビューしてまだ間もないというのに、「第17回日本フランス現代美術世界展」をはじめ、すでに3つの美術展に「発入選するな」とめきめきと才能を発揮し始めている。とはいえ、小さい頃から絵を描く

ことが好きだったとか、その道をめざしていたわけでは全くない。得意だったのは、もっぱら喧嘩のほうだ。破天荒な人生を地で行く男の軌跡をご覧あれ。

親分に憧れて、極道の道へ

元心さんは二人兄弟の次男坊として福島県に生まれ、葛飾区の高砂で育った。



「絵に描いたようなヤンチャで、ガキの頃から、喧嘩は強かったね。柔道、剣道やって、国体にも出たりした。15歳で家を出てからは、豆腐屋、レストランの厨房、廃品回収、；、食うために何でもやったよ。でも長続きしたのは、ヤクザだけだったけど(笑)」

刑事か、体育の教員になることを考えた時期もあったそうだが、25歳の頃、極道の世界に入ることを決意する。

「最初の親分に憧れて。男気あふれる背中が、カッコよかった。涙ある人間らしさに惹かれた。19歳で最初の女房と緒になって、子どもも3人いたけど、(ヤクザを)やるって決めた時、家族も親もみんな捨てた。尋常じゃないレベルで、迷惑も心配もかけることになるから」

炊事、洗濯をはじめ、親分のお世話すべてが、当時の元心さんの任務。もちろん、住み込みだ。親分が外出する時は、スーツやネクタイ、ワイシャツ選びもするし、風呂に入れば、親分の全身を隅々までキレイに洗う。「とにかく、親分を守ることが第一」。

親分がトイレに入れば、一緒に入る。飲み屋に行ったら、出て来るまで外で立つて待つ。あの頃は、日本酒、ブランド、焼酎……どんな酒でも、1人2軒につきボトル3本飲んでたけど、これが全然酔わないの。いつ殺られてもおかしくない状態だし、常に気が張ってたから。でも、自分の部屋に着いたら、電池が切れたみたいに、パタッとぶっ倒れたよ(笑)」

人生の涙は一度だけ。
俺は、もう絶対泣かねえ

「今じゃ減多に起きないけど、最初の抗争の時は震えたよ。ガチガチになってる俺に向かって、寿司屋に行つて、冷酒二つ持つてこい!と親分は言った。持つて帰ってきたら、ぴとっは、おまえが飲め、つて。よく気付け薬とかいうけど、この時の一杯はまさにそれで、飲んだら氣イ休まっちゃうって(笑)。おう、いつでもかかってくるって気持ちになっちゃった」

その後、兄弟分の組を渡り歩く中、5人の親分に世話になったが、最初の親分が一番心に深く残っているという。



元心

「生きている間は、毎日怒られればなしで、二度だって褒められたことなんか少ない。でも、あの人が亡くなつてから、1週間泣き続けたよ。その時を最後に、もう絶対泣かぬえつて決めた。今も、やっぱり俺にとつてのオヤジはあの人しかない。去年で28年目になるかな。毎年、年越しは深川にある親分の墓の前で過ぐすんだ。墓そうじをして、おせちを供えて。大みそかつて、終わりの始まりだろう？ その時だけは、オヤジとだったら、正直でいられるから。一人で会いに行つてよ」

絵に出逢えたのは、がんのおかげ

50歳を迎えた頃、元心さんは、本姓の塩澤を冠した「塩澤組」を地元高砂に結成し、満を持して、親分となる。しかし、心身共に酷使する生活が長すぎたせいか、破竹の勢いで、病魔に襲われてしまう。

「肺がん、肺結核のあと、肝臓がんになつちやうて。今は腎臓。透析も間近だったんだけど、去年、バイパス作るために入院したら、数値が若干良

ことをきかないよ(笑)。でも、コレに出会えて、体の調子も良くなったし、感謝だね」

当初は、浮世絵を中心とした「和」のモチーフを模写的に描いていたが、習作を重ねるごとに、壁にぶち当たつてしまった。

「俺の作品じゃないなと思つて、どんどん変えていった。今は、色んな人

くなつてたから、今のところ、セーフ(笑)。その代わり、今度は血管が詰まつて。俺は勝手に、マドシナ先生って呼んでるんだけど、面倒みてくれたのが、それは美人な女医なのよ(笑)。でも、最近妊娠したらしくて。もう一回だけ、診てあげるわつて言われちやうて、困つてるところ」

生きるか死ぬかの瀬戸際だということ。これほどユーモラスに、自分の闘病生活を語れるなんて。

元心さんが、初めて絵と出逢つたのは、肝臓がんで入院していた6年ほど前のことだ。

「何かに集中すれば、若干痛みが和らぐんじゃないかと思つて、若い衆に頼んで、スケッチブックと色鉛筆を買つてきてもらったんだ。それまで、絵なんて描いたことなかったけど、週刊誌に載つてる風景画をスケッチしたり、拾つてきたモミジを描いてみたりしてさ。病院長や食堂のおばちゃんたちも面白がつて、俺の病室まで見に来たよ」

とても初めて描いたとは思えない。たちの顔を思い浮かべながら、その時々自分に素直に、感じるままに描いてる。そこに、死んじやうた人もいれば、叱つてくれた人もいるのと同じで、完成した作品を見て、癒される人もいれば、涙する人もいるし、拜む人もいる。作品も人間と同じで、いろいろいつていうのは、相手方が決めること。俺にできるのは、正直に生きて描き続けること。馬鹿をみるかもしれないけど、それしかできないよ(笑)」



アトリエにずらりと並ぶ焼き絵。

通して描くこともザラだという元心さん。ひたむきな情熱と努力が天まで届いたのか、「第29回上野の森美術館 日本自然を描く展」を皮切りに、「第43回日象展」や「第17回日本フランス現代美術世界展」に作品が立て続けに入選し、2017年は、イタリアのシチリア島で開催される美術展にも、新作が出品される予定だ。



入院中に描いた第二作は、元心さんの原点。

御膳上等のクオリティ。しかしその後しばらく、絵のことはすっかり忘れていた。親分をやりながら、2013年、京成小岩にファッション雑貨の店「ロニー」を開くことになった。「俺の誕生日が6月22日だから、それをもじつてロニー(笑)。なんで始めたかつていうと、トリハビリのため。ヤクザになつてから、音信不通になつてた実の兄貴とも、また連絡を取り合うようになつて。あと、クロコティルとか皮革関係に詳しい知己の友人が、俺のマネージャー役を買つて出てくれた。お客さんを持つて、何かモノを作つてみたら？」と、二人にアドバ

イスをもらつて、プレスレットを作つたりしてただけで、夢中になれなく

「初めて喧嘩した時もそうだし、女を知つた時もかな(笑)。なんか震えてくるんだよね。3度目の入選の手紙が届いた時は、病院に行く前にポストを覗いたら、茶封筒がポストからちょここと出た。それを見た時、ブルブルつて震えたよ。人間、変わろうと思えば変われると思うの。入院中、地元のカタギの人が160人くらい見舞いに来てくれたんだけど、基本、病室で、人じゃない？色々考えた時に、この人たちをこれ以上、心配させたくない、俺も努力しなくちゃと思つた」

2015年2月19日、「焼き絵作家」本で生きていこうと決めた元心さんは、30年以上「筋に生きてきた極道の世界とケジメをつけるため、左手の小指を落とした。長年の功績はむしろ、病氣のこと…誰の目にも、そうする必要がないことをあえてした理由は二つあった。ひとつは、これまでいた世界で、自分のあとに続く人たちを思つて。もう一つは、芸術というヨソの世界に行くことを決めた自分自身への誓いだ。

て。そういうするうちに、そういうえば、絵が描けるよねつて、想い出したんだ」

ちなみに、元心さんの兄、塩澤政明さんは、コスプレ衣装専門店&変身写真館「Masabi」のオーナーであり、その世界では誉れ高いファッションデザイナーだ。

カタギ2年生の焼き絵作家

絵といつても、元心さんの場合、キャンバスに絵の具で描くのではない。本来、ウッドバーニングで使われる電熱ペンで、ヌメ革などの皮革を焦がすことによつて題材を描き出す「焼き絵」だ。

「絵が上手い人はごまんといるし、人と同じことはやりたくなかった。先生がいるわけでもなし、ぜんぶ独学だけど、木材じゃなく、皮革に電熱ペンで描く、という誰もやっていないことをやつていけば、俺だからこそ、作品を通して伝えられるメッセージがあるんじゃないかと思つて。ゆっくり描けば濃くなるし、早く描けば薄くなる。電熱ペンは、女と同じで言う

「アイツができるなら、ひよつとして俺も、私もできるかも？」と、人々が夢を持てるような生き方をしたいと思つてる。なにせ、まだ俺はカタギ2年生だから、大きなことは言えないけど、少し恥ずかしそうにつぶやいた元心さんの目は、キラキラに輝いていた。(岸由利子)



下野の Snackbar にて、元心さんの背中に言葉はいらない。

筆者プロフィール
著述家/画家 英国ロンドン、セントラルセントマーチン美術大学(CAMCA)卒業。在学中、スーツの聖地・サヴィル・ロウ1番地「ギブス&ホークス」で日本人女性として約2年半に渡る異例のテラーリング修行を伝授。帰国後、ブランド「マルコム」を創立し、東京コレクションにて最年少女性デザイナーとしてデビュー。ファッション界で活躍したのち、現職に転身。オーダースーツや腕時計などのファッション・芸術・文化の分野で執筆する。

アメリカの歌

American Tune

今年の夏、出張で日本に戻った時、私は一人、今年で29年通い続けているカフェに行った。

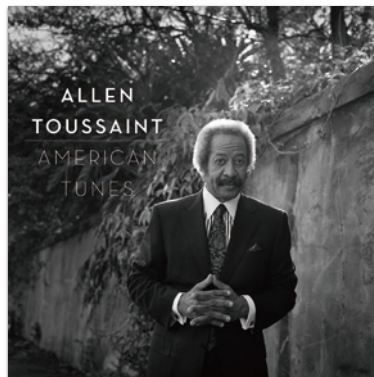
そこで音楽好きの店主夫妻に「これ、もう聴いた？」と一枚のCDを見せられた。昨秋亡くなったアラン・トゥーサンへの遺作がつい最近出たのだそうだ。「え？アラン・トゥーサンが亡くなったことすら知らなかったよ」と答えると、すぐにその場でそのCDを聴かせてくれた。

アラン・トゥーサンはニュー・オリンズR&Bの大物プロデューサーにして自身もミュージシャン。1950年代からプロデューサーとしての数々のヒット作を連発し、アメリカのポピュラー音楽の黄金時代を60年以上にわたり築き上げてきた巨人。ビートルズやローリングストーンズをはじめ多くのミュージシャンに直接の影響を与えたのは元より、今世界で活躍している全てのポピュラー音楽家は、たとえ本人が知らなかったとしても直接、間接に彼の影響下にあると言っても過言ではない。

そのアラン・トゥーサンへの遺作は彼のピアノ演奏主体のインストルメンタル曲が続く。取り上げられているのはジャズやブルーズ、R & Bの古典。その日その店には宮沢りえさんが一人で来ていて、私の目の前少し離れた席で熱心に台本を読み込んでおり、私は彼女の美しい横顔を眺めながらアランのピアノに浸っていた。

10曲ぐらいピアノ演奏が続いた後、突然曲調が変わりピアノではなく爪弾きのようなギターに合わせてアランの声が耳に飛び込んできた。聴き覚えのあるメロデー。ポール・サイモンの「アメリカの歌」というCDジャケットを見直すと、それが遺作の最終曲。意外な選曲だった。

ポールサイモンが歌うこの曲を私が初めて聴いたのは40年くらい前中学生の頃。単調な曲調でポソソと歌われ、歌詞は聴き取り難く、読んでも暗い感じで中学生の私には何を言いたいのかわからず、決して好きな曲ではなかった。しかし、その時聴こえたアランの歌い方は言葉をひとつひとつ丁寧に区切り、そして強く投げつけてくるようで、その言葉の意味が私の耳を通じてはつきりと、そしてしっかりと心の中に染み込んできたのだ。



●アラン・トゥーサンへのラストアルバム「AMERICAN TUNES」(アメリカの歌)
●YOU TUBE → Allen Toussaint - American Tune
で検索

And I dreamed I was dying.

死んでしまふ夢を見たんだ

I dreamed that my soul rose unexpectedly.

心が不意に体を離れて行く夢なんだ、

And looking back down at me,

そして自分を振り返つてんだ

Smiled reassuringly.

自分を勇気付けるように微笑んで、

And I dreamed I was flying.

そして、僕は空を飛んでるんだ

And high up above, my eyes could clearly see

上空から、僕の瞳ははっきり見えた

The Statue of Liberty sailing away to sea

自由の女神が海へと漕ぎ出し消えて行くのが

And I dreamed I was flying.

僕は空から見えていたんだ

We come on a ship they call the Mayflower,

僕らはメイフラワー号と名づける船に乗っ、

We come on the ship that sailed the moon

月に向かう船に乗っ

We come in the age's most uncertain hours

この不確実な時代にやっつ来た

And sing the American Tune.

そして「アメリカの歌」を歌っ

Oh but it's all right, it's all right, it's all right,

でも、もういいんだ、もういいんだ、もう

You can't be forever blessed.

永遠の幸福なんてあり得ない

Still, tomorrow's gonna be another working day,

明日からまた仕事の毎日

And I'm trying to get some rest,

だからほんの少しの休息を

That's all, I'm trying to get some rest.

ほんの少しの休息を

(歌詞全文 → American Tune/マイブロードで検索)

華やかなアメリカ音楽の黄金時代を築いた巨人が、死の直前、最後に残した歌の歌詞がこれとは、あまりに意外。そして寂しく、悲しい。アランは明るく賑やかな音楽で世界のファンを笑顔にしながら、その裏側で二人、今のアメリカの、世界の混乱に心を痛めながら、我々の前から飛び立っていったのか？自由の女神が海へ漕ぎ出し消えていくのを、眼下に見つめながら。

(斎藤陽)

写真: Pixabay

筆者プロフィール

昭和38年、東京生まれ。高校大学時代を通じて雑誌ロッキング・オンに執筆。卒業後大手自動車会社勤務。零細運送会社社長を経て、現在大手商社シンガポール法人勤務。



私が育った佐賀の町には、長い間、ハンバーガーチェーンが無かった。市内唯のデパートだった玉屋の斜向かいにモスバーガーができたのが、高校二年生の頃で、ロッテリアはもう佐賀の町を離れた大学2年生の頃。そして、25才の頃、佐賀にもマクドナルドができたんだよ、という噂を聞いた。

佐賀に住んでいると、何かを買おうと思えば立つと福岡に行くしかなかった。中学の終りくらいには、一人でふらふらと天神の町を歩いて、輸入盤などを漁っていた私が、頻りに寄っていたのは、アービーズというローストビーフサンドイッチのチェーン店で、後に、東京に出てきた当初、渋谷のセンター街にあつたアービーズは、渋谷の輸入盤専門店を漁った帰りの定番コースだった。輸入盤とアービーズは、私の中で、とても分ちがたく結びついていて、今でもローストビーフは、ヨーロッパのニューウェーブの味なのだ。私が、最近流行のローストビーフ丼や、ローストビーフ食べ放題が苦手なのは、そんなアメリカンとも言えないような食べ方をすると、ロンドンパンクの神様に怒られると思っ

ともあれ、天神のアービーズでハンバーガー的なものを食べていた頃、やはりマクドナルドは無かったと思う。吉野家でさえ神々しかったのを憶えている。「やったねパパ、明日はホームランだ」というCMさえ、まだマンガの中でしか見ていなかった。博多で食べる一番のご馳走は、ビクトリアの鳥釜飯と、風月のビーフバター焼き定食だった。ウォークマンでさえない時代、ポータブルのカセットレコーダーにイヤフォンをつないで、ダム下の新譜を聴きながら炒めたソフト麺の上に乗った薄切りの牛肉を頬張るのが幸せな高校生だった。

ハンバーガーを初めて食べたのは、小学六年生の頃、父親につれて行かれた唐津の観光ホテルのバララウンジ。そこで初めて、「フレンチフライポテト」というものを知り、カフェオレという不思議な名前を知り、ハンバーガーを食べた。食べにくいと思っただも、たまらなく美味しかった。ステーキよりこつちが好きだと子供心に思った事を、実は最近思い出した。

セブイレブンの「プリトロー」という、何だ

か不思議な食べ物がある。元々はトルティーヤで肉なんかを巻いて食べるメキシコ料理だそうだが、セブイレブンの開店当時からある「プリトロー」は、皮が薄いピザ巻きみたいな食べ物で、何とも中途半端な存在感が不思議と忘れられず、上京して、しばらくして近所にセブイレブンがあるアパートに住んで以来、ちよくちよく食べているのだけど、最近、その新作に「厚切りミートローフ&デミチーズ」というのが登場した。この「ミートローフ」というのが、いわゆるパテを焼いたような、ロックミュージシヤンの名前にもなったアメリカ伝統の肉料理ではなく、ハムとソーセージとベーコンの合の子みたいなもので、私は子供の頃から、これが大好きだったのだ。

ミートローフの正体は、ドイツのシュライフケーゼあたりのようだが、日本で、佐賀で、小学生の私が食べていたのはニッポンハムのハムとソーセージとベーコンの合の子みたいな加工肉のミートローフだ。そして、ほぼそのままのミートローフがセブイレブンのプリトローに入っていたおかげで、私の記憶の扉は開かれて、実は、私は子供の頃から、肉その

ものよりも加工肉に魅力を感じていたことを思い出したのであった。ステーキよりハンバーグ、ハンバーグよりソーセージなのだ。天然物よりも人工物が好きだという性癖は、既にこの頃には出来上がっていたらしい。焼き肉屋で必ず厚切りベーコンを頼む私に、何となく白い目が向けられる事があるのを、私は重々自覚しているが、好きなものはしょうがない。同じ輝きなら天然ダイヤより人造ダイヤの方が、人の技術が入っている分、上だという価値観は、意外に、高度成長期に子供だった世代には結構いるんじゃないかと思っ

閑話休題。中一の私は、そのハンバーガーをもう一度食べたくて、家の近所に行ってきたハンバーガー専門店に一人で行ったのだ。ダイナーっぽい店内は、しかし異様に薄暗く、アメリカンな調度品が、ただただ重厚なだけの薄気味悪いものに見えて、出てきたハンバーガーは、驚くほどハンバーグが小さくて、

親に黙って一人でこんなところに来てしまったことを後悔しながら、もそもそと食べたハンバーガーの、パンズに埋もれた小さなハン

バーグが、旨かったのだ。そして、スパイスと色々入っていたのだらう、味もしつかりして、ザツ加工肉で、でも肉の味もしつかりして、これなら小さなハンバーグでも納得だと、中学生のくせに、そんな事を思っただも、外に出たのだ。

雨が降っていて、店のドアの近くの電信柱には「にっかつ」になる直前の、日活ロマンポルノのポスターが貼ってあった。佐賀の町は、何故かよくわからないが、町のそこそこ日活のポスターが貼ってあって、見慣れてはいただけで、その「くの忍法、観音開き」のポスターには、何故か強烈に目を奪われた。雨に濡れて、端がめくれたポスターをじっと見つめて、その足で佐賀神社前にあつた積文館書店へ行き、文庫の棚で角川文庫版の山田風太郎の「くの忍法帖」を見つけて、暗くなるまで読み続けた。(納富廉邦)

筆者プロフィール

昭和38年佐賀市生まれ。立教大学在学中よりフリーライターとして娯楽全般をフィールドに執筆。現在に至る。東京ハイボールズのリードギター担当。著書、連載多数。

三十五歳の新人

僕がプロのカメラマンを始めたのは35歳。きっかけは当時勤めていた広告制作会社の突然の解散だった。

その会社で僕はグラフィックデザイナーとして働いていた。メインの仕事は駅ビルのポスターや折り込みチラシ、店頭POPなどの制作である。撮影があればカメラマンにイメージを伝えるために撮影現場に立ち会うことになる。元々写真が趣味だったので、カメラマンが楽しそうに撮影しているのを後ろで指をくわえて眺めていた。何度も立ち会っているうちに屋外ロケだったらライティングが必要なので自分でも撮れるかもしれないと思い始めた。バブル全盛の頃だったので、仕事は比較的的自由。さらにクライアントや代理店の立ち会いもほとんどなかった。ある時、昔の会社で仲が良かったカメラマンに機材を借り、さらに彼にアシスタントをお願いした。まずはチラシのロケでモデル撮影を敢行した。プロカメラマンがアシスタントだから露出もフィルム交換も完璧。それでも初めて撮る外人モデル、僕は緊張しながらも海辺で商品の服を着たモデルを何とか撮影することが出来た。これに味をしめて自分で撮れそうな時は自分で撮影した。アシストしてくれた友人のカメラマンにはカメラマンのギャラの半分をあげた。なので毎回撮影する度にカメラマンのギャラの半分が浮くわけで、しばらくしてから社長に交渉してカメラ機材一式を買ってもらうことになった。

そうやってデザイナーをやりながら撮影もするようになったが、バブルピークの時に突然社長が会社を解散したいと言いつつ出た。コピーライター出身のプランナーであった社長は、「今の日本はおかしい、そして広告が嫌になった。農業を覚えてさらに自分で家を建てたい」と言った。(実際に彼は国立農業学校に行つてから、その後5年の修行を経て大工の棟梁になったがその話は長くなるので別の機会に)そんな社長の下で好きにやらせてもらっていたので、会社が解散することになっても別の会社に就職する気にならず、何のあてもなくカメラマンになると決めた。

アシスタント経験も受注経験もゼロ、自分の仕事で撮影した写真のファイルとカメラマンの名刺を持って営業を始めた。35歳、錯覚と勢いだけの遅いカメラマンデビューだった。

ないけれど、普段は仕事を受けることが多い自分にとって、人に原稿依頼することや取材をすることも初体験。どんな原稿が上がってくるか、楽しみでもあり、不安でもある。昔のように徹夜は出来ないけれど、やる気になればやれる、と思う。

六十歳、再び新人となった。(島隆志)

生まれて初めて撮った俳優は桃井かおりと岡本健一。制作・シーダツシユ



そんな感じでカメラマンを始めたので当時の僕は「経験」という言葉が苦手だった。「経験より挑戦」と自分に言い聞かせて初体験を繰り返していた。仕事は毎回これが最後だと思つて撮影していた。失うものがないことぐらい強いものはない。

今この歳になつて思うのは「経験は大切」である。挑戦も大切だが経験も同じくらい大切である。その両方がなくては行かない。

この雑誌も僕にとつたら挑戦である。デザイナーと写真に関して言えば経験が活かされる気はするが、雑誌を発行するのは初体験である。編集長らしきことはいしてやっ

会社解散直後にバブルは崩壊したが、それでも当時は今より社会に余裕があったせいなのか、経験の無いにわかカメラマンにも仕事を outlet してくれる奇特な会社があった。デザイナーの仕事で食いつなぎながらカメラマンの営業を始めて半年が経つた頃、映画のポスターなど結構いい仕事をしている制作会社にダメもとで営業に行った。ディレクターに写真のファイルを見せたら「鳥さんはタレントの撮影をしたことがありますか？」と聞かれた。あるわけがないので正直に「ありません」と答えた。それでもディレクターは来週桃井かおりさんの映画のポスターの撮影があるのでやってみませんかと聞かれた。ここで出来ませんと答えたら二度と仕事は来ないと思ひ、二つ返事で「やります！」と答えた。しかし、帰り際にディレクターが「じゃあ撮影は4×5のカメラでお願いします」と言われた。

僕は「はい、わかりました」と答えたが4×5カメラは大型のカメラで、フィルムも大きく、一枚一枚フィルムを差し込んで撮影するテクニックも経験も必要なカメラだ。そんなカメラの経験もあるわけがない。しかし受けてしまった以上やるしかない。親から借りた金で急遽4×5カメラを購入し、撮影の前日、夜漬けて撮影の特訓をした。

筆者プロフィール
昭和30年横浜市生まれ。岩手大学工学部に入學するも授業はほとんど出ず、写真部で写真漬けの日々を送る。結局4年途中で退学し、横浜の美術学校を経てグラフィックデザイナーとなる。その後カメラマンになり、さらに鳥製作所を設立し、現在はデザインと写真の両刀使いで広告、出版、音楽の世界で活動中。還暦を迎えて仕事ばかりじゃ人生悔いが残ると思ひ、本誌を発行する。

殺したヤツは、ワタシが殺す。

骨董市で購入した古い瓶。これを売っていた若い女性の店主の説明では、ロンドンのテムズ川の水が引いた時に友人が川底を漁って出てきた瓶とのこと。この瓶に刻印された英文字を読むと「LEA&PERRINS」 「Worcestershire sauce」とあった。調べてみると世界初の英国のソースメーカーであるリー・ペリン社のウスターソースの瓶であることがわかった。昔、レストランで使われて捨てられたものだろうか。テムズ川の底で何年もの間眠り続け、ある日、骨董好きの若者によって地上に引き上げられた。テムズ川はさしずめタイムカプセルの役割を果たしたことになる。白っぽくすすけたちよつと小さい瓶は、撮影用の光をその背後から当てると、まるで眠りから覚めたかのように凛々しい姿を浮かび上がらせた。



眠りから覚めた瓶

女優 伊澤恵美子と散歩する

昭和な散歩

その三 向島のカフェ

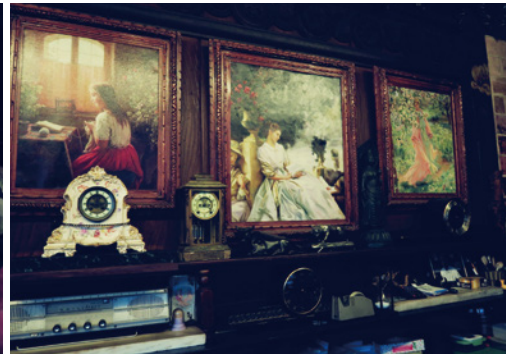


前号で紹介した床屋のそばに「カド」という生ジュースと胡桃パンのカフェがある。角にあるから「カド」という名前なのだと思う。古びた外観に惹かれて撮影の休憩がてら入ってみた。

店内は質素な外観とは打って変わって壁には古典的な油絵が並び、天井にはシャンデリアが、テーブルには薔薇が描かれている。生ジュースと胡桃パンとは不釣り合いな程クラシクな雰囲気だが気取った感じがしないので居心地はいい。カウンターではキヤスケツト帽をかぶったひと癖ありそうなマスターが本を読んでいた。

何を頼もうか迷っていると、マスターが生ジュースの種類と胡桃パンのサンドイッチのメニューを早口で一気にしゃべるのだがほとんど理解できない。元気になりそうな活性ジュースという名前のジュースを注文してみた。活性ジュースとは数種類の野菜と果物と蜂蜜をミックスした生ジュースだが、セロリが苦手なければ結構美味い。そして2階の釜で焼いているという胡桃パンのサンドイッチも手作りならではの素朴な美味しさ。ちよつと浮世離れた空間に魅せられて撮影が可能か聞いてみたら「どうぞ」と言うので店内で伊澤さんを撮影させてもらった。

一見気難しそうに見えるマスターと話してみたら意外と話し好き。床屋と同様この店も2



店内にはクラシックな絵画が所狭しと並ぶ。



マスターはこの古いミシンでいろいろなモノを作る。この店に似合う真空管式ラジオからはクラシックが流れていた。体に良さそうな「活性ジュース」。さわやかな青汁といった感じのジュース。

代目。父親がやっていた当時の店の雰囲気を作るべく自分の手で残しているらしいが、実際には結構大変とのこと。油絵は年に1回は交換し、テーブルと天井に描かれた味わいのある薔薇の絵は全てマスター自らの手描きである。若い頃は服飾の仕事を目指していたというマスターはカウンターの端に置いてある年季の入った業務用のミシンで何でも作るという。

マスターが子どもの頃には回りに料亭がいっぱいあって、「こはそこへ行く男たちの待ち合わせや連絡場所として使われていたと説明してくれた。当時は伊達男達がよく来ていたという。伊達男という言葉自体久しぶりに聞いたが、粹でお洒落な男と言った意味だろうか。

最近ではカップルで来ても、飲み物をひとつしか頼まなかったり、二人ともスマホを見ていたり、この店でも今風な現象に出会うらしい。

「男が見栄を張らなくなつたんですかね」とマスターは言った。確かに最近の男はそうかもしれない。「粹がる」「男が少なくなった。「粹がる」とはその言葉通り、粹っぽく見せるといふことだ。粹と言えらるるまでには達してはいないが、せめてそれっぽく見せたいという若さゆえの見栄である。若い時には、特に男には「粹がる」ことは一人前の男になるための必要な行為かもしれない。最近では粹な政治家にもなかなか出会わないし、こんなに先の見えない時代、粹がるほど頑

張り甲斐がないのも確かではある。

江戸から生まれた「粹」という美意識は日本独自の感覚と言える。カドのマスターも大変だとは言いがたが、ちよつと風変わりな父親の店を出るだけそのままの形で引き継いでいるという行為はやはりひとつの粹な生き方なのだと思う。



笑顔がかわいいマスター。帽子とベストは同じ生地から作ったもの。写真には写っていないが乗馬スポンの作りにもかなりのこだわりがある。

伊澤恵美子プロフィール

9歳から舞台上がり、モデル・女優として活動。

映画「子宮に沈める」主演・日タイ国際共同製作映画「アリエル王子」監督・人主演他「キョメンタリー映画」ちいさなあかり「企画など多岐に渡り活動中。熊本市PR特命大使。FB: izawaemiko hata: emikozawa

「30歳で人生初のひとり飲み」

一人でお酒を飲むなんてことはなかった。まして祝い酒なんて。

独立して7年目、自分がちょうど30歳になった時に「想いを伝えなければ」と思ってたわけです。どこかで気になっただけなら何もしてない自分に気づいたのは、経営する会社名をBRDと命名していたからでした。自分がかつてジャズに夢中になり、その世界に最も大切な音楽家がいる事をBRDの屋号が思い出させてくれたのでした。

高柳昌行に逢いに行くのは中途半端な気持ちではないけないと考え、ライブに1年間通い、顔を覚えてもらう事から始めた。「なれなれしい奴だな」と思われたくなかったので安易に声をかけたり、あいさつをするのはやめておいた。

西荻窪の『ケタの店』での出来事。

あの日の高柳はギター2本を用意し、1本を立てかけ、1本をモーターを使って弾いていた。モーターの軸には30センチぐらいの棒が取付けられており、それをギター弦にこすりつけた奏法。そこにメロディーとかハーモニーは無く「ギヤ〜!」とか「キキキ〜!」とか騒々しい金属音が延々と続く「メタインプロヴィゼーション」というスタイルの音楽でした。複数のメンバー達と大音量

妻には、いつかそんな日が来る事を伝えてあったので、ビデオカメラを買ったことを理解してくれた。「どーせなら、ちゃんとした物を買った方がいいんじゃない」と言ってくれ、SONY製の民生機の中では一番上位のビデオカメラとマイク等の付属品合わせて約50万円を家計費から捻出してくれた。その時に妻から「私は、videoのマークSEを買っから」と宣言されたが、それが何なのか、いくらぐらいする品物なのかは知らなかった。

1980年代の終わりは日本の景気は最高潮で、僕の仕事も順調だった。それから2年間ぐらい、ほとんどステージをビデオカメラを持って同行した。ビデオも写真も録音も趣味でもなかったけれど、高柳さんの一番近くにいられる自分がうれしくて仕方がなく、1ヶ月に2回程のライブに同行させてもらった。名古屋へも3回行っている。夜行列車で戻り朝から会社に出た。

1991年6月、高柳昌行は突然亡くなった。僕は音楽を聴くのをやめた。

音楽をやめて10年ぐらい経ったある日、海外の高柳ファンからメールが来た。あまり熱心なファンだったの何度かやりとりをして、うちに彼がミュージシャンである事がわかった。頼まれたレコードをカセットにダビングして送ってあげると自分の参加したアルバムが何枚か送られてきた。当時、僕は音楽を聴いていなかったし、ロックはまったく知らないで、CDは棚に納め、そのアルバムがどんな物であったかは覚えていない。その彼が日本でライブを行うことになり招待の案内が来たので、英語のわかる友人を連れてライブハウス(たぶ



モーターに棒を付け回転させてギターを鳴らす(筆者撮影)

で演奏する彼独自の音楽の延長線上にありながらもそれ以上に難解な響きが続く。演奏中に「ガツン」と大きな音が鳴り、立てかけたギターが倒れて折れた。

その日は、サインをもらうために最新作(とは言っても1年以上前に発売された作品)のレコードを持参していた。客は僕ひとりだったので、サインをもらうには好都合でしたが、ギターが折れた日は気まずいかなと思いつつもサインをもらい、1年間ずっと通っている伝え、自分の名刺を渡してきた。名刺にはBRDのロゴが入っている。僕はBRDに気がついてもらえる事を期待していた。第二部のはじめに高柳は「チャーリーパーカーは、正面を向いて吹いている…」云々とBRDからみ話を始めたので、うれしかった。

ん阿佐ヶ谷にでかけた。そこは混みあっていた。音楽が始まっていて、若い連中が一杯で身動きできなかった。「え?なにコレ!」混み具合も演奏された音楽にも驚いた。ジャズでもロックでもなくノイズのような、ビートのあるノイズだった。こんな音楽が若い人を魅了しているのは知らなかった。昔は、誰もが嫌いだっただるで曲のエンディングの盛り上がりのような、騒音音楽が「人気なのだろうか?」ショックだった。

高柳さんがぼくのやり方は10年先じゃないと理解はできないと思つたと言っていたけれど、それなのか?

1年後、その高柳ファンのミュージシャンは日本に住みつく事になり、バンド電子まで遊びに来て、駅前の居酒屋に行つた。僕はそのミュージシャンの名前をずっと発音できなかった。当時、僕は個人的に色々大変な時期で音楽にも興味がなく、ほとんど真剣に聴いてはいなかった。HMVのロックコーナーでノック・ユースのCDを見かけるまでジムさんが有名な人だなんて実感がなかった。あれから、また10年経ってしまつた。ジム・オルークさんの名前はライブハウスで見かけるので今度行つてみようと思つている。

ここで、音楽を知らない人のために説明しておきます。

高柳昌行の音楽について言葉で説明するのは難しく、特にジャズも現代音楽も知らない人への説明は難しい。誤解を恐れずにわかりやすく具体的に云えば、そこに聞こえてくる音は「ロックのエンディングでジャンと

その年の暮れに渋谷のJean Jeanで行われた自主コンサートでチャンスが訪れた。終演後に機材の撤収を指示していた高柳さんに、用意していた3枚の写真を渡した。

私「せ、先月、無断で撮影しました。申し訳ありません。よかったらどうぞ?」下キドキ!

高柳「あの日は、誰も撮影してなかったから、よかったよ。ありがと!」

私「えーあ、あ、」
高柳「……」
私「あの、わたし12年間ファンでした。18の時から高柳さんのファンでした。」

高柳「うなすく」
私「今度、ビデオを撮らせて頂けませんでしょうか。」
高柳「ん、ビデオね〜」
斉藤(下キドキ)

高柳「1月6日にジャズメンクラブね、わかる?横浜のジャズメンクラブ。」
私「わ、わかります。何度も高柳さんを聴きに、」
高柳「……」

私では、1月6日に伺います。失礼いたします。」
心臓は爆発しそうだった。この時僕はビデオカメラを所有していなかった。カメラですら借り物だった。それに2週間後の1月6日は、年末に帰郷して東京に戻ってくる日だ。でも、そんな不安は感動が吹き飛ばして

くれた。
うれしくて、うれしくて、立ちそば屋でひとりカンパイした。人生初のひとり飲みをした。

全員参加で盛り上がる箇所はわかると思いますが、そのエンディング部分のジャンの箇所だけを延々と長く続けるような状態。ただし、楽器のチューニングは合わず不協和音、楽器や機材が破損する限界の大音量。弦楽器であればすべてのポジションをかき鳴らす。音は「ギヤ〜」「サー」「グア〜」等、人間が不快に感じる、金属が擦れ合う音、電動ドライバーが鉄に穴をこじ開ける音、エンジン等の機械音、更にカセットテープ音源から杭打ち、悲鳴、等がミックスされた音が長時間続けられる。ここち良さとは対極の音……

ここまで書いて、自分では説明ができない事がわかった。数年前に他界した、義理の母(享年92歳)との会話を思い出した。

「人生で一番恐ろしかった体験は、B29の低空飛行よ。この歳まであれほどの大きな音は聞いた事がないわ。安則さん、音が窓ガラスを割ったんですよ!」
(斉藤安則)

筆者プロフィール

昭和35年、北海道生まれ。株式会社バード電子代表取締役、23歳で電子部品設計製造の会社を設立。18歳の時にロックファンをやめジャズファンになる。高柳昌行の晩年に永くファンであった事を告白。2年間ライブに同行し、記録用にビデオ撮影を行う。現在は高柳昌行専門のレーベルMINIVADSを運営。不定期に未発表音源のCD化を続ける。

ちよと前に亡くなった作家の野坂昭如は、僕が子どもの頃から不良親爺というイメージがあった。そしてこの人が歌う「黒の舟唄」がなぜか好きだった。その詞は男と女のどうしようもない深くてエロティックな関係を表現しているように感じたが、意味はよくわからなかった。ただ、



霜降りの
白い
肉の
せつない
甘み。

テレビで野坂氏のぶつきらぼうとも思える歌い方を見て、その姿が格好良いと思った。「ローエンドロー、ローエンドロー」という特徴のあるフレーズが繰り返される曲である。決して心地の良い曲ではなかったが、妙に耳に残るせつない曲だった。それから随分と年月が経ち中年になってから盲目のギタリストで歌手でもある長谷川きよしが歌うこの曲を聴いて気に入り、何度も聴いた覚えがある。

その野坂氏の書いた週刊誌の文章を中学生の頃に読んだ。当時親爺が買ってくる週刊文春の最後の方にちよとエロティックなグラビアページがあつて、時々こっそり眺めていたのだが、本文ページの中に野坂氏の「エロトピア」という連載エッセイがあつた。「エロトピア」というくらいだから当然その内容もエロティックなものだろうと思つて読んでみた。既に脚

フエチという言葉は当時はまだ一般化していなかったであつた少年はそこで強烈にエロティックな文章に出会つた。電車で向かいの席に座つた女子高生のスカートの中について書いた文章だった。(野坂氏はセーラー服フエチであつた。)当時はパンストがまだなかったから、片方の脚ごとにストッキングを履いていた。そのストッキングが下がらないように太腿の部分をゴムの太いバンド(靴下留め)で留めるのだが、ゴムの靴下留めは太腿の柔らかな肉に食い込んで、ス

トッキングを脱ぐとゴムバンドの痕が太腿の柔らかな肌にくつきり刻まれる。(その経験は僕も子どもの頃に半ズボンにタイツを履いた経験から知っている。痒くなるのだ。)野坂氏はそのゴムバンドの痕がくつきりと残つた太腿の皮膚をひろげて眺めてみたいと書いていた。脚フエチ少年はその文章をとてエロティックに感じて、その光景が脳裏に焼き付いた。ネットで検索したら野坂氏の「エロトピア」は書籍になつていたので、古本を注文して改めて読んでみたらそんな文章は見あたらなかった。僕の記憶違いで「エロトピア」ではなかったのだから野坂氏が書いた文章だとは思ふ。しかし、エロトピアは非常に機知に富んだおもしろいエッセイである。

野坂昭如と言えば直木賞をとつた「火垂るの墓」ということになるのだが、僕の場合はそれに加えて「黒の舟歌」と「靴下留めの痕が付いた白い太腿」ということになる。黒のサンクラスに灰汁のあるしゃべり方で、直木賞作家というよりは不良親爺というイメージが強かつたが、いろいろ読んでみると根は真面目な親爺であつた。残念なが亡くなつてしまつたが、彼こそ正に、適当でいい加減、そして純情な親爺であつたと思う。(鳥)

連載コラム 競馬の風景 その三

愛しのステイゴールド

昨年の冬、頭の馬がこの世を去つた。国内レース48戦5勝、20回G1レースに参加して勝ち数0。こんな成績なのに、ファンの熱い要望でJRAも関係者に協力をもとめ京都競馬場で引退式が盛大に行われた。その馬の名は「ステイゴールド」。映画「アウトサイダー」の主題歌に使われたステイヴィー・ワンダーの名曲から競馬ファンの投書によつて名付けられた競走馬である。

ステイゴールドは1994年、北海道、門別で名馬「サンデーサイレンス」の仔として生まれた。子馬の頃は小柄ではあつたけれど、バランスのいい、きりりとした可愛い子馬だったそうだ。しかし、人を乗せる調教の段階になると、徐々に気難しい面を見せ始めてきた。1996年の12月、名馬の仔とあつてテューター戦から次戦までフランスの名手ペリエが騎乗した。しかし結果は思わしくなく、この後主戦騎手となる熊沢騎手へ変わった。競走馬は勝たないと上のクラスに行けない。そして、騎手も一流騎手から二流騎手のほうに流れて行く。熊沢が3戦目に初騎乗したレースは最終コーナーを曲がらず競争中止。その後、勝てない馬を集めた未勝利馬戦をやつと6戦目で脱出した。同期の馬達の中には、すでに最上クラス「G1」でしごきを削つている馬もいた。同期のトップの馬達から大きく水を開けられたステイゴールドだったが勝て

はしないけれど、大きくも負けず、賞金は加算されていった。順位別の賞金が上積みされた事により4才限定の最終G1、菊花賞になんとか出場できるよになつていった。結果は10番人気で8着。まだ同期の一流馬に肩を並べるまでにはいたらなかった。1ヶ月後抽選で騎手が決まる特別なレースに、名手武豊が騎乗する事になった。結果は惜しくも2着に終わったが、それよりも騎乗を終えた武のコメントに驚いた。「あの馬、レース中に寄つてきた馬に噛み付いたよ」とのことだった。この頃からステイゴールドの気性の激しさが目立つようになつてきた。調教助手が馬房の前を遮るだけで突進し、主戦騎手の熊沢は「近寄つて来る馬には威嚇するし、振り落とされるのは、しょうちゆうで、噛む、蹴られる、回し蹴りが飛んでくるんです。噛まれるのを心配したりする馬なんてそういませんよ」と話していた。ある調教助手からは「猛獣だよ、あの馬は!肉を食わしたら食うんじゃないの」とまで言われていた。年が替わつた1998年、4戦連続2着となり、G1春の天皇賞3400mに堂々進出した。結果は10番人気と注目はされなかったが2着に健闘し、競馬ファンはステイゴールドの存在に注視するよになつた。翌年になると、もうG3クラスは卒業し、G1やその前哨戦G2だけに参加するよになつた。二流馬が揃うG1レースで4度の2着、3着が3度。ファンの間からは次は勝つだろう、から次は勝たしてやりたいという不思議な連帯感が生まれてきた。

主戦騎手として騎乗していた熊沢は下ろされ、武豊に騎手が変更された。そして雨の目黒記念で2年半ぶりに勝利した。たかがG2クラスの勝利なのだが、ファンの鳴り止まない拍手に調教関係者や厩務員が泣いた。こんなにステイゴールドを応援してくれていたんだと気付かされた。翌年数え年でステイゴールドは8才になつていった。同期の名馬達はすでに引退し種牡馬として余生を暮らしている。2000年の暮れあたりから成績が落ち始め、2001年ついに引退レースが組まれた。舞台はG1国際レース「香港ヴァース」2400m、騎手は武豊、ステイゴールドが得意にしてきた中長距離戦だ。調教師から、「ステイは、トップに躍り出るとそこで走らなくなる。だからどんなレースでも勝てない」と言われていた。この最後のレースで残り200m、トップから5馬身差、ステイゴールドの猛追が始まった。一瞬、追いが鈍くなりかけた所からもう一度、豪脚が繰り出され、ゴール前数センチで相手を差した。最後の50戦目でステイゴールドは自ら夢を勝ちとつた。2016年、12月11日、今年の香港ヴァースで日本馬の本馬の「サトノクラウン」が勝利するまで、日本馬ではステイゴールドが唯一の勝ち馬だった。ステイゴールドは、このレースで引退した。ファンの要望で行われた引退式ではステイヴィーワンダーの「ステイゴールド」が流された。

この曲には、青春の輝きを忘れないで、という意味が込められているそうだ。しかし、物語はここで終わらなかつた…。 つづく (藤田和男)

筆者プロフィール
昭和34年熊本市生まれ。福岡、東京でカメラマン修行の後熊本市でフリーカメラマンとして独立。
競馬歴は約20年。JRAに奉納した額はおよそ100万円を上回る。